

## 「がん」と「コロナ」

「広報の青野世話人」が、ホームページやメール欄で、「皆さんのご便り」を、実にタイミングよく配信されており、会員の皆さん方とも、ここ2～3か月、お互いに、お会いしてなくても「凄く親近感」が持てて、楽しんでおられると思います。

私も、5月はじめから、拙文を「青野世話人」に、随時お送りし、掲載の有無などは、紙面の空き具合など、状況に応じて「没にされても構いません」と添え文を付けております。

最近は、「皆さんのご声」も、「ご声かけの天才・桑原代表」が、電話などを通じての、軽妙なやり取りで、おひとり、おひとりのお気持ちを、短い文章ながら、誠に含蓄ある内容は読み応えがあり、企画のすばらしさを改めて噛みしめております。

さて、青野さんとは、今回は、5月20日ごろ、「穴埋め文」をお送りすると約していましたが、皆さんの盛り上がりで、必要性も少なくなってきたものと思いつつ、書き込んでみました。

5月19日の、NHK・朝7時の「ニュース」で、表題のような放映があり、「がんは二人に一人が罹病する時代」でもあり、「コロナ」と関連させて、自分自身も「がんを経験」しているので何事かと関心を持ちながら、見ていましたが、特に関わり合いがあるとも思えない内容なのでホッとしました。

なぜなら、「湘現会」の「定例会講演」では、会員講演も、年に一度ほどの、内々の決め事などもあり、2017年2月に、鎌倉学習センターで、「前立腺がんステージIVから如何に生還したか：人と人との交わり(まじわり)の大切さ」の演題でお話をさせていただき、お陰様で、「余命半年」も、こうして今、減らず口を叩いて生きております。

「がんもひとまず消滅」しましたが、少なくとも5年間は、3か月ごとの「経過観察期間」、6か月ごとの「放射線照射の追跡」など必要とのことで、通院しており、4月には一回、5月には二回受診しました。

通院に当たっては、自宅での検温、マスク装着、院内待合室でのケアなど、それなりに神経を使わざるを得ませんが、「不要不急？」と、勝手に、自分なりに思ったりして、躊躇しながらも、主治医が丁寧に診てくれるので、しばらく「受診延長？はいかがでしょうか？」と言い出せないままです。

今日もインターネットで、こんな記事が目につき、ご参考までに。

### 「かかりつけ医」の受診減少 新型コロナ感染への不安から

新型コロナウイルスに感染しないか不安に感じるなどして、患者が「かかりつけ医」への受診を控える動きが広がっています。

医療情報サイトが、先月行った調査では、診療所の医師およそ1460人のうち86%が「外来患者が減った」と答えました。

こうした中、かかりつけ医からは「治療が必要な患者が来なくなった」とか、「健康状態が把握できない」といった懸念の声も上がっています。

<健康管理を、しっかりなされておられる、皆さんにはいかが思われるでしょうか>